

▲旗を立てた馬形埴輪（国指定重要文化財・酒巻14号墳出土）

## 利用のご案内

- 開館時間 午前9時～午後4時30分（午後4時以降は入館できません）
- 入館料 個人 一般200円 大学・高校生100円 中学・小学生50円  
団体 一般160円 大学・高校生 80円 中学・小学生40円  
（20名以上を団体とします）
- 休館日 月曜日（祝日・休日は開館）  
祝・祭日の翌日（土日は開館）  
毎月第4金曜日（企画展中は開館）  
年末年始

## ご案内

- JR高崎線吹上駅から
  - ・行田市駅・行田折返し場・総合教育センター行きバス（前谷経由）忍城下車すぐ
  - ・行田折返し場・総合教育センター・工業団地行きバス（佐間経由）新町1丁目下車西へ徒歩10分
- 秩父鉄道行田市駅から徒歩15分
- JR高崎線行田市駅から
  - ・市内循環バス西循環コース（右回り）忍城址・郷土博物館前下車すぐ
  - ・市内循環バス西循環コース（左回り）行田市バスターミナル下車徒歩5分
  - ・市内循環バス観光拠点循環コース（右回り）行田市バスターミナル下車徒歩5分



# 行田市郷土博物館

見学のしおり







展示室全景

行田市は、<sup>おしじょう</sup>忍城の城下町としてだけでなく、明治以降は足袋の町として、さらに時代を<sup>さかのぼ</sup>遡れば古墳に代表される古代の歴史と文化に特色をもった町として発展してきました。

行田市郷土博物館は、市民のみなさんがこうした郷土行田の歴史と文化に対して理解と認識を深め、さらには生涯学習の場として利用していただくために、かつての忍城本丸跡に建設され、昭和63年2月17日に開館しました。

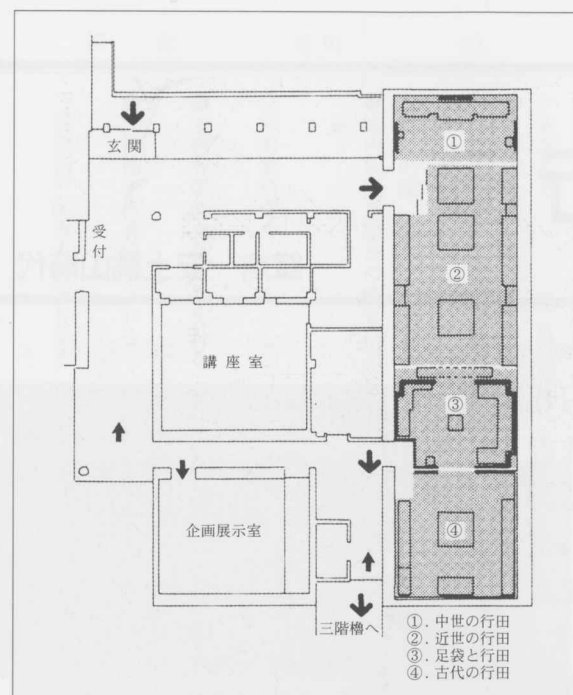
博物館では、これらの歴史を物語る資料を系統的に収集し、保存し、調査研究してその成果を展示や講演会、講習会などを通して市民のみなさんに発表していきます。

展示についての詳しい説明や施設の利用方法等について、受付や展示解説員に遠慮なくおたずね下さい。

## 展示室案内

行田の歴史の特色を、『行田の歴史と文化』の統一テーマのもとに、

- ①「中世の行田」で忍城が築城されたこと。
- ②「近世の行田」で江戸時代の忍城と城下町の様子。
- ③「足袋と行田」で行田における足袋製造の歴史。
- ④「古代の行田」で古墳を中心とした古代の歴史と文化をたどる構成になっています。



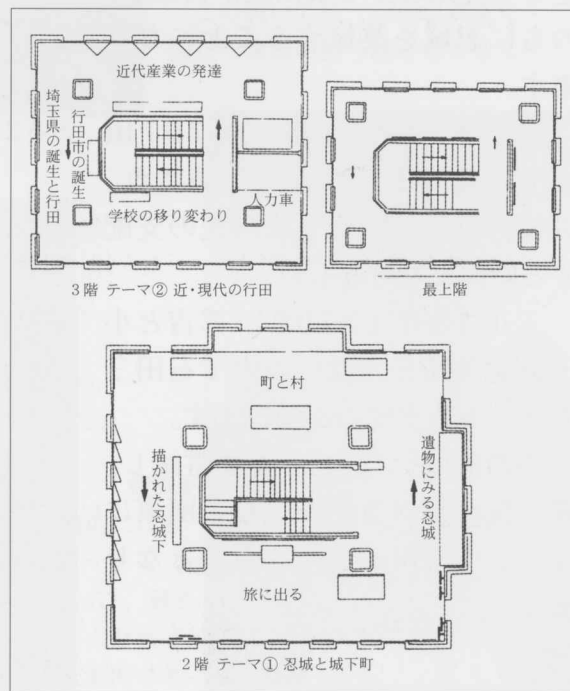
館内見学順路と展示室の構成

この<sup>やぐら</sup>櫓は、かつての忍城にあった櫓をモデルに再建したもので、二階から展示室になっています。

二階は江戸時代の庶民の生活を絵を中心に展示しています。

三階は、明治から現在までを写真を中心に展示しています。

最上階は、展望台として現在の行田を見ていただけます。



三階櫓の展示室と展示構成

# 中世の行田

鎌倉～安土桃山時代

貴族の世から武士の世に代わり戦国時代の動乱を経て、豊臣秀吉による天下統一までの時代です。

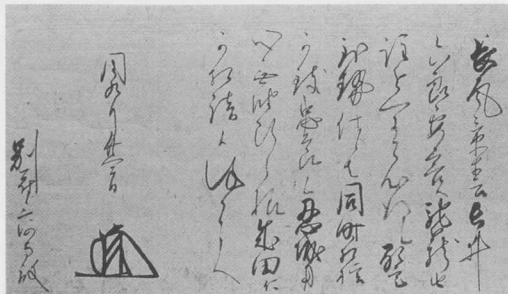
この激しい時代の歴史の担い手として、行田および周辺の武蔵武士の活躍が記録に残されています。

彼らの中から、現在の熊谷市上之を本拠地とする成田氏が台頭し、のちに忍城を築城することになります。

忍城は、文明11年(1479)頃までには成田氏により築城され、以後約百年にわたり成田氏の支配する時代になりました。

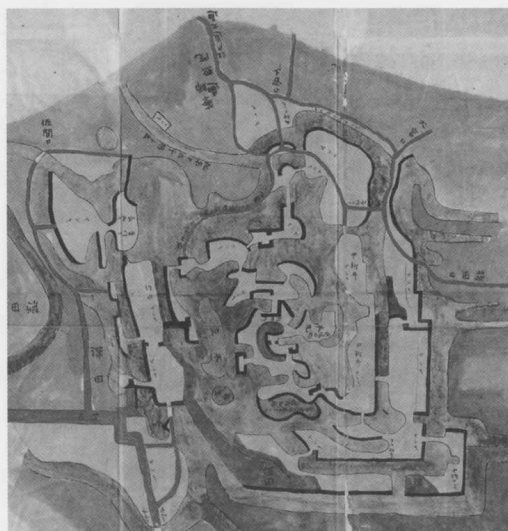
天正18年(1590)、秀吉と小田原北条氏との戦いの中で石田三成らによる水攻めを受けます。

この戦いにより忍城は開城し、成田氏百年の支配が終り、関東に入国した徳川家康の持ち城となりました。

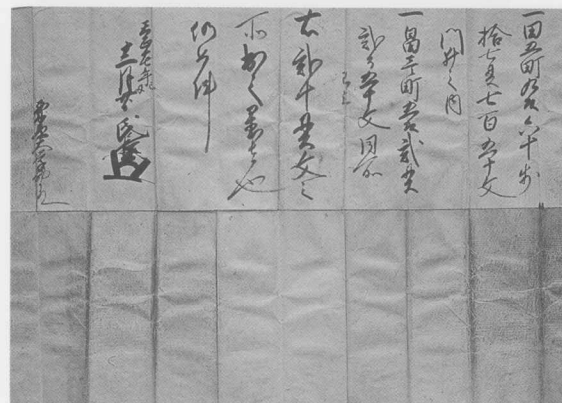


▲足利成氏書状

この書状の中に、忍城・成田と出てくることにより、忍城が文明11年(1479)にはもう築城されており、城主が成田氏であることがはっきりしました。



鎌倉	室町	戦	国	安土桃山
<ul style="list-style-type: none"> <li>○源頼朝、征夷大將軍となる (一一九二)</li> <li>●大日種子板碑建立される (一一三六)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○室町幕府開く (二三三八)</li> <li>●天洲寺聖徳太子像作られる (二二四七)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○応仁の乱 (二四六七)</li> <li>●成田氏関東騒乱に巻き込まれる (二四七九)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○松平家忠、忍城に入城</li> <li>○徳川家康、関東に入国 (二五九〇)</li> <li>●忍城水攻め (二五七五)</li> <li>○長篠の戦い (二五七五)</li> <li>○ザビエル、キリスト教を伝える (二五四九)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●忍城、番城となる</li> <li>●忠吉、清須に移る (二六〇〇)</li> <li>●忠吉、関ヶ原の合戦で活躍</li> <li>●家康四男松平忠吉、忍城主となる (二五九二)</li> </ul>



◀成田氏長判物

氏長による家臣の栗原大学への知行地の宛行状です。

この氏長の代に、秀吉による小田原北条氏攻めがあり、当時北条氏に味方していた忍城も石田三成らの秀吉方に水攻めされました。

この戦いの後、忍城は関東に入国した家康の持ち城となりました。

◀天正年間忍城図

永正6年(1509)に、忍城を訪ねた連歌師宗長の書いた日記によれば、城の周囲は四方沼水で、霜で枯れた葦が幾重にも重なり、水鳥が多く見えたとあります。この絵に見るように、まさに、天然の沼地の中に、島状に残る微高地や自然堤防を巧みに利用して作られていました。

▶板碑

中世の人々の信仰を伝える板碑が、市内には数多く残されています。

市内最古のものは、嘉禎2年(1236)、最も新しいものは、元亀2年(1571)になります。

展示では、市内に残る板碑の中から代表的なものを紹介しています。



# 近世の行田

江戸時代

忍城が家康の持ち城となった天正18年に松平家忠が派遣され、水攻めで傷んだ城の修復をします。

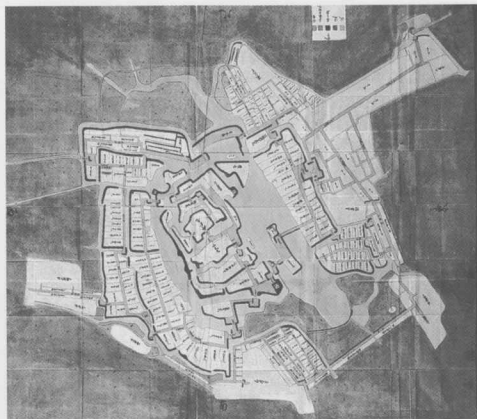
修復後の天正20年、家康の四男忠吉が入城。関ヶ原合戦後に清須に移ります。

忍城にはその後城番が置かれ、周辺の河川改修や農業開発が積極的に進められました。

寛永10年(1633)に松平信綱が城主となり、同16年には、阿部忠秋が移り以後184年間阿部氏の時代が続きます。

文政6年(1823)、伊勢の桑名から松平氏が移封し、48年あまりで明治を迎えます。

戊辰戦争の戦火を逃れた忍城でしたが、明治6年に主な建物は競売に付され、かつての面影は土塁を残すのみとなりました。



▲ 寛政年間忍城図

阿部忠秋から始められた忍城大改築により城と城下町の整備が進みました。沼や深田などの天然の要害を利用した城から、櫓や白壁の塀を持つ城へと変わりました。



江戸	戸	明治
○江戸幕府開く (一六〇三)	●忍藩、版籍奉還する (一八七二)	●忍藩は、忍県となる (一八七二)
○徳川家光が三代將軍となる (一六二二)	●品川沖の三番台場の警備 (一八六七)	○大政奉還 (一八六八)
●松平信綱、忍城主となる (一六三三)	○ペリー来航 (一八五三)	●房総半島沿岸の警備 (一八四二)
●信綱、島原の乱を鎮圧 (一六三八)	○異国船打払令 (一八二五)	●伊勢桑名から松平氏が忍城へ (一八二三)
○鎖国完成 (一六三九)	●享保の改革 (一七一六)	○忍城御三階櫓完成 (一七〇二)
●阿部忠秋、忍城主となる (一六三九)	○徳川幕府開く (一六〇三)	



## 徳川家康

忍城東照宮に伝わる家康画像です。この画像は、長女亀姫が奥平家に嫁ぐ時持っていったものとの言い伝えがあります。亀姫の四男忠明の分家独立した家が、忍城最後の城主松平氏になります。



## 松平忠明

家康の孫にあたります。豊臣滅亡後の大坂の復興に尽力。のちに姫路城に移り西国の押えとなり、忍城最後の城主松平氏の祖となりました。

## 忍城模型

幕末頃の資料により作成した模型。天然の沼地を巧みに利用した城で、各郭は橋で結ばれていました。これらの建物は、明治6年に一般に払い下げられました。

## 松平忠明着用具足

全体的に戦国時代末期の特色を良く残しています。この具足には、忠明が、大坂夏の陣で着用したとの言い伝えが残されています。





# 足袋と行田

行田の足袋製造の始まりについての明確な資料はありません。

17世紀後半頃の亀屋某が最初とも言われていますが、記録の上では、明和2年(1765)の道中案内に「忍のさし足袋名産なり」とあります。

また、町明細図によれば江戸時代の終わり頃には、足袋製造が最大の産業になっていました。

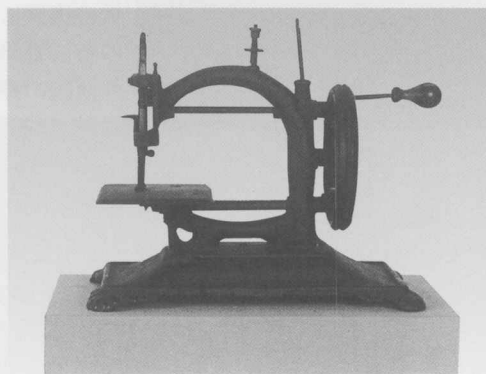
明治20年代になると、工場生産となり、ミシンも導入され飛躍的に生産量が増加しました。

行田で足袋製造が発達した理由は色々説明されていますが、綿栽培の発達とその糸を使った「青縞」と呼ばれる小巾の綿布が特産であり、それが足袋用の布として利用できたこと。藍染が盛んであったことなどです。



▲ 手縫い(裁断)

足袋は本来、自分の物は自分で縫うものでした。しかし、特殊な技術を必要としやがて専門に作る者が現れてきます。



▲ 手廻しミシン

明治20年代になると、縫製工程の中にミシンが導入され、手縫いからミシン縫いへと変わってきました。

江	戸	明	治	大正	昭和
---	---	---	---	----	----

- 戦中・戦後、原料不足から統制経済の時代になる
- 工場における足袋製造が最盛期を迎える
- 足袋商が中心となり、行田電灯株式会社設立される (一九一〇)
- 忍商業銀行が設立される (一八九六)
- 明治二〇年代にミシンが導入される
- 橋本喜助が酒蔵を改造して足袋の工場をつくる(一八八六)
- 天保年間の町明細図に、足袋屋が二七軒記載され、この時すでに、行田の中心産業であることが知られる
- 道中案内の中に、「忍のさし足袋名産なり」とある (一七六五)
- 享保年間の町明細図に、足袋屋が三軒記載される
- 貞享年間に、行田に足袋を専門に扱う「亀屋」があったと言いつづられている
- 明暦の江戸大火で、革不足となり、木綿足袋が急速に普及する (一六五七)



▲ 足袋屋の店先

行田は、足袋の生産地であり、消費地にあるような綺麗な店先はありません。

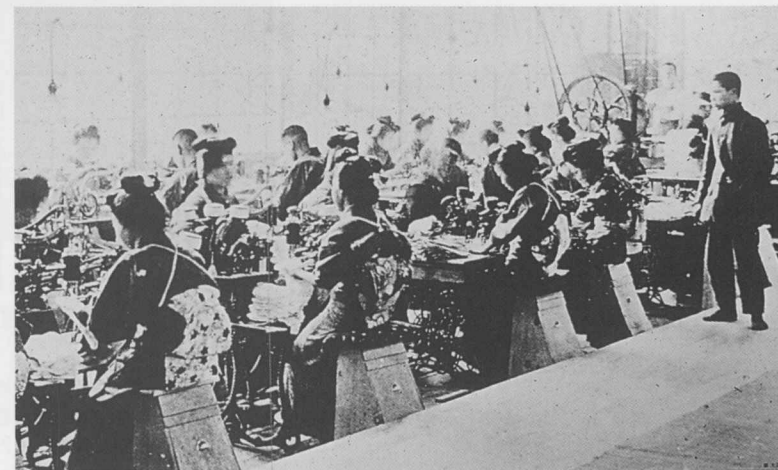
足袋屋の独特な看板は、軒に上がっている足袋の型の形をしたものです。

大正時代になると、ほかの地域では大資本により大企業化した足袋製造会社が出て来ますが、行田は、個人経営による小規模経営が中心となりました。

同時に行田の足袋製造のもう一つの特色は、工場生産だけでなく、町を歩くと、どこからともなくカタカタとミシンを踏む音が聞こえたと言われるように、内職による生産が大きな比重を占めていたことです。

## 大正3年の足袋工場▼

明治43年に、足袋商が中心となり行田電灯株式会社をつくり電気の安定供給をはかったことにより、飛躍的に生産量が増加しました。



# 古代の行田

縄文～平安時代

行田市は、古代から豊かな水利に恵まれた低地と大宮台地から伸びる台地の突端に多くのムラや古墳群が営まれました。弥生時代には池上・小敷田遺跡で稲作を行う大規模なムラの遺跡が確認され、古墳時代には埼玉古墳群の造営を契機として市内一帯に古墳群が造営されました。

特筆される市内の古墳群として、酒巻古墳群があります。利根川右岸の大規模な古墳群であり、現在までに23基の古墳が確認され、重要文化財に指定された14号墳出土の埴輪など貴重な資料が多く出土しています。

奈良時代以降には、寺院の造営や墨書土器、紡錘車、柿経の出土など中世へと移り変わる様相を示す資料が数多く見られます。



▲旗を立てた馬



▲筒袖の男子



▲力士

酒巻14号墳 国指定重要文化財  
【酒巻14号墳】

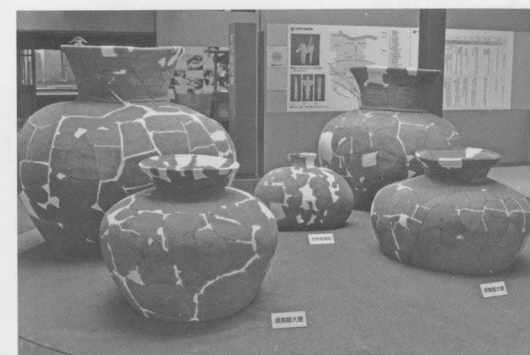
6世紀後半に築造された円墳で、墳丘のテラス部分に外側に円筒埴輪、内側に形象埴輪と二重に埴輪列がめぐっていました。旗を立てた馬や渡来系の衣装の人物など渡来系文化の影響を受けたと考えられます。

旧石器	縄文	弥生	古	墳	奈良	平	安
-----	----	----	---	---	----	---	---

- この二つの乱に行田ゆかりの人々の活躍が記録されている
- 平治の乱 (一一五九)
- 保元の乱 (一一五六)
- 大同年間に盛徳寺建立と伝えられる
- 平安京遷都 (七九四)
- 国分寺建立の詔 (七四一)
- 万葉集に四首収められる
- 壬申の乱 (六七二)
- 大化改新 (六四五)
- 七世紀になると若小玉の八幡山古墳、小見の真観寺古墳などが築かれる
- 五世紀末頃に稲荷山古墳が築かれ、六世紀代には、市内各所で古墳が築かれる
- 金錯銘鉄剣に銘文が刻まれる (四七二)
- 池守・池上・小敷田遺跡で、須和田期の住居、墓が調査される
- 市内各所から、住居跡、土器が検出されている
- 長野中学校校庭より石器出土

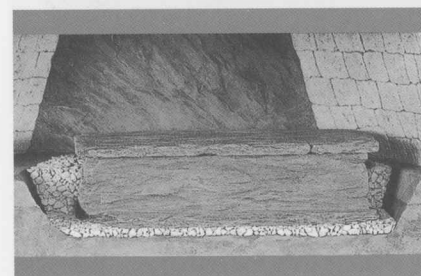


▲縄文時代後期の注口土器 (陣場遺跡)



▲墓前祭祀 (酒巻8号墳)

墓前祭祀とは、古墳に被葬者を埋葬するときに行うお葬式のようなものです。このように大型の須恵器甕などが用いられました。

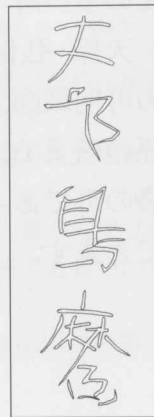


▲石室模型 (小針鎧古墳)

石室は被葬者の棺が納められた施設です。壁石は榛名山産の角閃石安山岩、奥壁は長瀨産の緑泥片岩を用い、崩れないように工夫して石を積み上げました。



▲「丈部鳥麻呂」銘紡錘車 (小針遺跡)



# 忍城と城下町

江戸時代

忍城の城下町は、東に鳥のくちばしのように伸びた形をしており、城の外郭防衛線の中に、町家や武家屋敷が配置されていました。

城下町は各時代に拡張整備されてきましたが、特に阿部忠秋が忍城に移ると、忍城の大改築が始められ、孫の正武の代、元禄15年(1702)頃になりようやく完成したと言われます。

享保年間(280年ほど前)頃の町明細図によれば、忍城大改築のため大工などの建設関係の職人さんの多い町でした。

天保・弘化頃(約170年ほど前)の町明細図では、約1割が足袋関係の職業で、この時からすでに足袋の町であったことを知ることができます。



▲ 増補忍名所図會

文政6年(1823)、伊勢桑名の松平氏が忍城に移り、新しい領地である忍の名所図を家臣の岩崎長容に増補させたのが本書です。

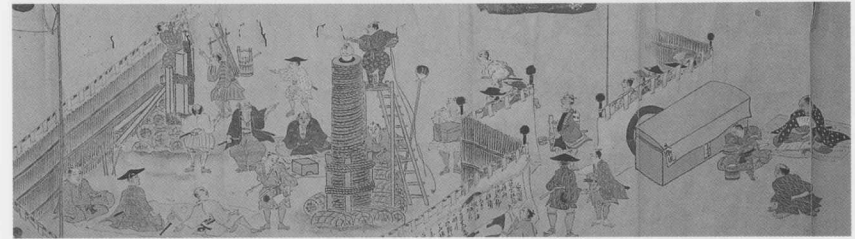
原本は、天保年間の増補で、考古、名勝、旧跡、古刹、風俗などが絶妙の筆致で描かれ、当時の行田を偲ばせる唯一の風土記です。



◀ 呉服屋

この絵馬は、東松山の箭弓神社に奉納されているものですが、描かれている店は行田の呉服屋山田清兵衛商店です。

ここに描かれる店は現在でも菓子の店として使用しています。



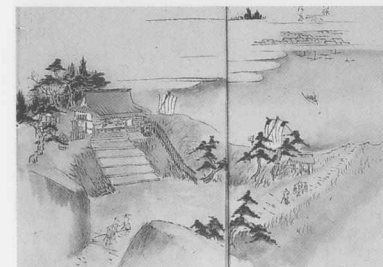
▲ 炮術形状図式

岩崎長容が忍藩砲術指南井狩家のために描いたもので、砲術とは砲術のことです。

この中に描かれるように、小砲から大砲まで数多くの種類がありました。

忍藩は特に砲術訓練に熱心で、藩から伊豆の江川家に藩士を派遣したり、何流でも良いから習得せよと盛んに奨励します。

嘉永6年(1853)、忍藩は品川沖の第三台場の警備を担当しました。



▲ 増補忍名所図會 (川俣関所)



# 近・現代の行田

明治～昭和時代

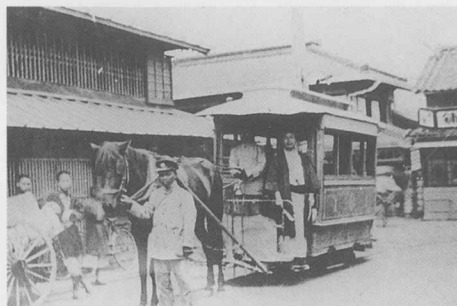
明治4年(1871)7月の廢藩置県により忍藩おしけんがなくなり、忍県になり、さらに同年11月には最初の埼玉県に合同していきました。

わずか4ヶ月でしたが、忍県が置かれ、かつての忍城二ノ丸にあり殿様ご住居と呼ばれた建物が県庁にあてられました。

明治22年(1889)に成田町、行田町、佐間村とその周辺が合併して忍町が誕生しました。

この忍町の時代はまさに足袋に象徴される時代で、足袋は終戦後の需要減まで、行田の町を支えた基幹産業でした。

昭和24年に市制を施行し、行田市となり、以来周辺の村と合併を重ね、今日の市域を形成してきました。



▲ 忍馬車鉄道

明治16年に現在の高崎線が開通した時、行田にはレールが敷設されませんでした。

鉄道の必要性を痛感した行田の人々は、明治34年に行田・下町しもまちと吹上停車場とを結ぶ馬車鉄道を開業させました。

以来20年あまり営業されましたが、大正11年頃に廃止になりました。



▲ 忍商業銀行

地元産業の資金安定のため明治29年に行田の商家や地主らが中心となり設立された銀行。

明 治	大 正	昭 和
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 西南戦争 (二八七七)</li> <li>○ 秩父事件 (二八八四)</li> <li>● 併し忍町となる (二八八九)</li> <li>● 成田町、行田町、佐間村が合併し忍町となる (二八八九)</li> <li>● 忍商業銀行開業 (二八九六)</li> <li>○ 韓国併合 (二九〇一)</li> <li>● 忍馬車鉄道全線開業 (二九〇二)</li> <li>● 行田電灯株式会社設立 (二九一〇)</li> <li>● 第一次世界大戦 (二九一四)</li> <li>● 北武鉄道羽生・行田間開業 (二九二二)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 羽生・熊谷間が秩父鉄道として開業 (二九二二)</li> <li>● 馬車鉄道廃止 (二九二二)</li> <li>● 関東大震災 (二九二三)</li> <li>○ 満州事変 (二九三二)</li> <li>● 持田、星河、長野村、忍町に合併 (二九三七)</li> <li>○ 太平洋戦争 (二九四一)</li> <li>● 忍町が市制を施行して、行田市となる (二九四九)</li> <li>● 鉄剣から一五文字の銘文発見 (二九七八)</li> <li>● 博物館、御三階櫓同時開館 (二九八八)</li> </ul>	



◀ 忍沼

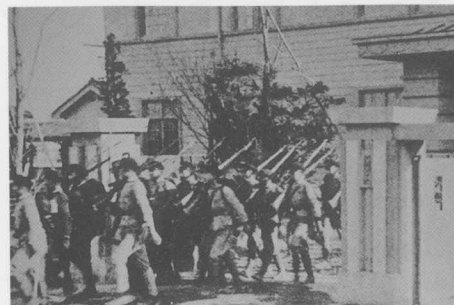
現在の市役所のある通りで、かつての忍城の堀になります。この堀は天然の沼地で城無き後は、広い沼ぬまひとして残され、年に一度の沼の掃除を沼干と呼び、大きな魚が取れたといわれています。

その後埋め立てられ、現在は市役所、産業文化会館などが並び、末端部分を公園として利用しています。



▶ 町並み

現在の商工センターの屋上あたりから撮影したもので、奥に見える建物が忍町尋常高等小学校で、現在の市役所の位置になります。



◀ 軍事教練 (忍商業学校)

戦争の影は学校においても色濃くなり、子供達の多くは勤労に出かけ、残された子供達も軍事教練と言う名の訓練が課せられていました。